

令和3年4月号～令和4年3月号掲載分

浪江町復興計画 【第三次】を策定

豊かな生活、魅力あふれる
まちづくりを目指して

この時期の復興に向けた主な動き

- R 3. 4月 新常磐交通が町内を運行開始
- 6月 「NAMIE WATER」がモンドセレクション「金賞」を受賞
- 7月 標葉郷野馬追祭が開催
- 8月 いこいの村なみえがグランドオープン
- 8月 なみえ水素祭り開催
- 9月 隈研吾氏らと「浪江駅周辺整備事業に関する連携協定」を締結
- 9月 苅宿カントリーエレベーターが完成
- 10月 米国ランカスター市と「水素社会の実現に向けた自治体パートナーシップ宣言」に調印
- 10月 震災遺構浪江町立請戸小学校が開館
- 10月 棚塩カントリーエレベーターが完成
- 10月～11月 県内外で浪江町政懇談会および帰還困難区域に関する住民説明会を実施
- 11月～2月 なみえスマートモビリティの実証実験を実施
- 11月 第4回ふくしま植樹祭を町内で開催
- 11月 請戸漁港竣工式を実施
- 12月 「ラッキー公園 in なみえまち」が完成



「NAMIE WATER」
モンドセレクション
「金賞」受賞（6月）



震災遺構浪江町立請戸小学校開館（10月）



なみえスマートモビリティ実証実験（11月～2月）



いこいの村なみえグランドオープン（8月）



吉田 賢人さん(北幾世橋)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：1月12日 「令和3年4月 広報なみえ掲載」

浪江町の変化を直に感じたいと思い、戻りました

大学生から社会人となった20代のほとんどの間、浪江町を離れて首都圏におられた吉田さんだからこそ、同じ年代の友人・知人とつながりたいという思いが強いのでしょうか。ご友人たちとの交流の場として開設を計画されているウェブサイトが盛んになり、若い世代が結集して、これからの浪江町や相双地方の大きな力となることを願っています。



▲吉田さんをモデルに、お知り合いがお描きになった絵とともに

◆あの東日本大震災の時は、どうしていらっしゃいましたか

当時、私は大学3年生で、神奈川県にある寮にいました。が、すごい揺れでした。思わぬ外に出ましたが、戻ってテレビを付けると、仙台空港に押し寄せた津波の映像が目飛び込んできました。衝撃的な映像でしたので今でも鮮明に覚えています。

その後、原発事故もあり、家族は福島市に避難してましたので、正月などはそこに帰省してましたね。

小学校3年生から高校3年生まで相馬野馬追に出場しました。中学校3年生の時に南

相馬市小高区の乗馬クラブに入り馬術競技を始め、明治大学から声を掛けていただき進学しました。当時、強豪と言われていたのですが、1階が厩舎でその上に男ばかり約6畳の部屋に3人ずつ。18人ほどで生活するような清潔感のない学生生活でした。大学を卒業後は、千葉県富里市の有限会社成田乗馬クラブに就職して7年間勤め、29歳で退職しました。

その後、浪江町に戻り、念願だった相馬野馬追にも出場しています。昨年は新型コロナウイルスにより規模縮小と残念な気持ちもありましたが、震災以降も先輩方が地域の伝統文化を守り続けておられますので、私も大好きな野馬追の歴史を継承していきたいと思っています。

代表を務める株式会社SAMでは、主に復興事業や再生可能エネルギー事業などに携わっており、双葉郡や浪江町の「復興」と新たな「まちづくり」の一助になりたいと思っています。

また、実家のある室原地区は現在も帰還困難区域ですが、除染もしていただき草木などで荒れていた土地も農地として復元されました。解除までの保全と解除後の活用のため、昨年、農業法人ランドビルドファームを立ち上げました。

◆震災後の浪江町はいかがですか。友人・知人、あるいは町に何か伝えたいことはありますか

震災後間もなく、実家の荷物整理などで一時帰宅した時には、町並みを見て、こんなにも変わってしまったのかと寂しさもありましたが、以前の職場を退職して浪江に戻る頃には復興も進んでいましたし、暗い印象は無くなりました。

同級生の何人かが浪江町や南相馬市、いわき市などに戻ってきていますが、それすらお互いに気付けない状況なのも何か寂しいな。また、避難先での就職や、遠方で家庭をもつ人たちもいますが、それぞれの事情や環境の下で頑張っていると思います。今は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で動きづらいのですが、そんな地元の仲間たちと改めて情報交換したいと思っています。

南相馬市に住む友人が浪江町で花の栽培を始めました。他にもつながりたいと思っている人たちにも気付けてもらえるように、彼と「何か動き出さないか」とウェブサイトを立てて発信しようかと相談をしています。サイトを通じて仲間を募ったら、同世代のコミュニティができるのではないかと期待しています。

ふくしま花フェスプロジェクト



特定非営利活動法人Jin 代表
かつらおこちょうらん胡蝶蘭合同会社 業務執行役
Smile farm 代表
fuku farming flowers 代表

清水裕香里さん(幾世橋)
杉下 博澄さん(葛尾村)
谷口 豪樹さん(川俣町)
福塚裕美子さん(川内村)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：2月5日 「令和3年6月 広報なみえ掲載」

花を通してふるさとの復興を目指す、4人の挑戦

今回は、浪江町と隣り合う町村の方々もお迎えしてのグループインタビューになりました。いずれも花に関わる仕事を通じて、震災やコロナ禍を超えて新たな地域産業を創ろうとする若い世代の人たちです。

それぞれのフィールドは、生まれ育ったふるさとであったり、新たなふるさとになったりと様々ですが、その地域で新たな仕事を介して復興を願う思いや今の状況、そして地域や事業へのこれからの抱負などについて、お話を伺いました。



清水さん



杉下さん



谷口さん



福塚さん

◆東日本大震災・福島原発事故
が起きた時は、どこで何を
していましたか

福塚さん 大阪府貝塚市生まれ

の私は、東京で3年間仕事をしたらドイツに学びに行こうという目標を持って花屋で園芸と花の仕事を始め、その1年目にあの震災が起きました。

園芸の同僚であり、大切な友人のふるさとが川内村で、震災の年(平成23年)の8月に村を訪れた時、荒れ果てた田畑や人のいない村を見て悲しむ姿を見て、役に立ちたいと思いました。そこで、花の仕事からいったん離れ、翌年5月から村に移住して米作りや畑仕事、復興イベントなどを手伝いました。

清水さん あの時、勤務するNPO法人Jinのデイサービスがまもなく終わるという時間帯で、揺れが収まった後、利用者さんを送り届けました。翌朝、原発事故が起き、利用者と共に郡山市へ移動したりしました。Jinが県北方部3か所に事務所を置き、私は二本松市勤務だったので、避難先の福島市から通勤しました。

平成25年に町内への立ち入りができるようになり、まず野菜を作り始めましたが、モニタリングの結果で出荷できなくなりました。翌春(平成26年)か

ら、町の勧めもあって、トルコギキョウやリンドウの栽培を始めました。

杉下さん 出身は葛尾村です

が、当時は田村市船引町にある遊技場のマネージャーでした。シフト明けで町内のアパートに居て地震に遭いました。混乱していた隣近所の人たちのお世話をした後、店に行ってお客様の手助けや自宅への送り届けなどを終え、職場は解散になりました。

その後、両親や弟と船引町で合流して栃木県那須塩原に避難し、馬の蹄鉄師の施設や両親の知人宅にお世話になりました。1か月後、私一人で船引町に戻り、職場で地震の後始末や状況確認をしながら、営業再開に向けた準備をしていました。

谷口さん 地震の時は、茨城県

水戸市のゴルフショップに勤務していましたが、福島市に転勤になりました。そこで妻と出会い、妻の両親が小菊の栽培をしていて、繁忙期に少しだけ手伝ったことが、花作りのきっかけになりました。原発事故で川俣町山木屋地区から川俣町内へ避難をしているにも関わらず、小菊作りをしていて、避難してすぐに営農とはすごいな、と思いました。

農業への興味が湧いていたと



▲取材会場となった葛尾村復興交流館「あぜりあ」にて

ころに、川俣町と近畿大学の連携事業によるアンスリウム栽培者の募集があり、応募。11人が川俣町全域に建てた各々のハウスで切磋琢磨することになりました。熱帯アメリカ原産のアンスリウムは日本国内でもまだ生産が少なく、競争相手も少ないことから、震災後の新しい花き産業としての可能性は大きいと思っています。

◆震災後、花作りを始められた経緯や地域への思いと、これ

からの事業計画などについてお聞かせください

杉下さん

会社員として職場の再開に向けて尽力しつつも、全村避難した生まれ故郷が気に掛かりました。人がいない冬を迎えた景色の無残さを見ながら、葛尾村は地図の上からも消えてしまっているのではないかと。原発事故という理不尽な災害に義憤を感じながらも、真正面から向き合っていくことができることはないかと考え、基幹産業である農業をやらうと思いました。

村が胡蝶蘭栽培にチャレンジする有志を募っていて、その事業計画の精度の高さに共感して応募したことがきっかけです。

葉タバコの乾燥ハウス跡地を拠点に、平成29年1月に3軒の農家と1つの法人とで合同会社を立上げました。栽培指導を受けるために千葉県や群馬県、山梨県などに研修に行ったり、花き市場を視察したりしました。

これからは葛尾をはじめ、浜通りに胡蝶蘭栽培の産地形成ができることを目指しています。先ほど話した合同会社は村の事業に取り組むために法人化、3年後には各々が立ち上ることが前提でした。新型コロナウイルス感染拡大（以下、新型コロナウイルス）の影響で少し遅れていますが、来年度は独立するための

準備をします。これまでは仕事を増やすことに取り組んできましたが、波及させていく段階に入ります。

また、アグリカレッジや農業高校などの連携を図り、村内や浜通り12市町村で次世代の担い手を育てたい。同時に、村の移住定住促進につながるよう、花き栽培が生業として成り立つ環境を作っていきたいですね。

清水さん

私にとって花作りは初めてでしたが、畑のハウスできれいな花を育て、出荷できることはいいなと感じています。初めはトルコギキョウとリンドウでしたが、リンドウの栽培は岩手県が盛んということもあり、トルコギキョウに絞りました。

Jinが法人として花で収益を上げることは当然のことですが、花き農家は決して「きつい・汚い・儲からない」ではないことを伝えながら、花で営農をしたい人を応援したいです。平成27、28年頃から営農の相談を受けたり、職員として受け入れて指導したりしました。来年度は研修制度を導入し、受入れを予定しています。

福塚さん

川内村で3年目を迎えて、活動に限界を感じていた頃、復興支援も充実してきましたので、念願のドイツ行きを叶

えるために村を離れました。出発に際して村の仲間たちに話した時、「川内に戻ります」と言っちゃったんです。私の正直な思いだったんですね。ドイツには1年滞在中の後、東京で学び直して平成30年に村に帰ってきましたが、今はここで生きて行きたい、村の復興を見届けたいと思っています。

30年以降は自宅を教室を開いたり、双葉郡内を営業に回ったりしながら、ファン作りをしてきました。

そして3年目となる今年4月中旬頃に店をオープンする予定です。切り花、園芸、ガーデンを併設する全国でも珍しい広い店になります。

花を軸にしながら、本当にやりたいことを少しずつ形にしたいと思っています。

谷口さん

先の未来の話よりも、アンスリウム栽培に取り組んでいることを通じて、川俣町や福島県の良さを、もっと全国に発信していきたいです。

今、新型コロナウイルスの影響で外出が難しい家族に向けて、少人数・予約制の観光農園を開こうと、クラウドファンディングに挑戦しています。アンスリウム狩りやイチゴ狩りなど、農業の楽しさを体験して欲しいと思っています。



福島県

長山 徳子^{のりこ}さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：2月24日 「令和3年5月 広報なみえ掲載」

浪江町は、ブレイクした楽しい思い出ばかりです



▲共に活動するスタッフさん方の写真の前で

年目のお祝い
を考えていた
矢先に、新型
コロナウイル
ス（以下、新
型コロナ）感
染拡大が起き
ました。10年
前は浪江町の
方々も結構参
加いただきましたが、当時
50、60歳の方

浪江町から福島市に避難し、その年の5月には市内に女性専門フィットネス・スタジオ「UP-BEAT（アップビート）」（以下、スタジオ）をオープン。浪江町の頃と変わらぬ活躍をされてきた長山さんに、この10年間を振り返りつつ、これからについても聞かせていただきました。

また、ご結婚後、30年近く浪江町で暮らし、生まれ育った神奈川県よりも長く親しんだ浪江町で過ごした日々を懐かしそうに話してくださいました。

◆この新型コロナウイルス感染拡大による自粛が、大きな転機になりました

平成23年5月に福島市でスタジオを再開した頃は、口コミだけでした。転機は、平成27年に飲食店や美容院、スクールなどの街の情報を掲載したクーポンマガジン「HOT PEEP ER（ホットペッパー）」のWeb予約サイトを開設し、スタジオの宣伝をした頃からでしょう。まだ福島市には専門のスタジオがなかった「ホットヨガ」も始めたことで、会社帰りの若い会員さんも増え、平成29年頃にはようやく軌道に乗れて、思い返すと100人以上の会員さんになっていましたね。スタッフや会員の方々と10

はもう60、70歳でしょう。体調の変化や家族の介護、さらに新型コロナウイルスの影響で、なかなかお越しになれません。

スタジオではこの新型コロナウイルス禍に立ち向かうために、令和2年5月から自宅でもできるオンライン・レッスンを切り替えましたが、インスタグラムやフェイスブックなどソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を使い慣れていない年代の方には、難しいようです。一方、全国の様々な人たちとつながることができるおもしろさもありますよ。

また、新型コロナウイルスの自粛中、「50代からのインナーチャイルドダイエット」を書き、令和2年10月にAmazon（アマゾン）から電子書籍として発行しました。ダイエットアドバイザーとして実体験に基づいたノウハウを伝えるとともに、浪江の思い出や3・11のことも織り交ぜました。

◆浪江の近所の方やスタジオの会員さんに、これまでの感謝と、これからの抱負を伝えたい

浪江町高瀬のスタジオは今、夫が事務所として使っていま

す。サンプラザ近くにあった自宅はもう住むことはできません。ご近所の方や浪江のスタジオの会員さん方には、お別れの挨拶もせずに避難してしまいました。本当にありがとうございました。かわいがっていただいた息子も、高校を卒業し、春には仙台の専門学校生です。

思い返せば、浪江町が私にとって一番はじめていた時代でした。バブル景気の頃、スタジオの皆さんと町の「サンバカーニバル」で優勝したこと。また、福島県の歩け歩け大会や町の秋の運動会で準備体操のリーダーを務めたこと、札幌で開催されたYOSAKOIソーラン祭りに「ワンダーなみえ」の仲間たちと出場したことなど、数え切れない思い出があります。本当に楽しく、懐かしい日々は忘れられませんね。

今後は、ヨークカルチャーターや二本松駅前市民交流センターなど、一部のサークル・レッスンは続けますが、この福島市大森のスタジオは3月で閉じます。そして、オンライン・レッスンをヨガやダイエット講座を発信しながら、私しかできないレッスンをこれからもお届けしていくつもりです。

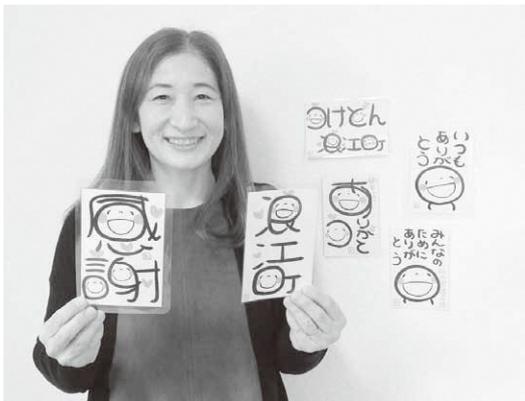


只野 玲子さん(請戸)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 村田・吉田

取材日：12月10日 「令和4年3月 広報なみえ掲載」

お世話になった皆さんに「笑い文字」で感謝の想いを伝えたい



▲笑い文字を手に

宮城県名取市にお住まいの只野玲子さん。現役の保育士として仕事をしながら、かわいい「笑い文字」の普及活動を行っています。渡した相手が自然に笑顔になり、ほっこりと幸せな気持ちになれる「笑い文字」。そこに込められたふるさとの皆さんへの想いを伺ってきました。

◆保育園で被災

～翌日には町外へ

私は新潟県の出身で、結婚し浪江町臨時職員としてコスモス保育園、請戸小学校児童クラブや大堀幼稚園にも勤務していました。

震災時は、コスモス保育園に勤務し、地震が来たのは、子供たちをお昼寝から起こそうとした時でした。震度6強で立つていられない程の揺れでしたが、子供たちの安全確保に努めました。揺れが収まって、靴を履き、外に避難しました。子供たちの素早い動きに感動でした。子供たちのお迎えも仕事や道路の被害もあって夜遅くまでかかりましたが、無事全員引き渡すことが出来て安心しました。

請戸の消防団の分団長をしていた夫が、見回りや津波からの避難誘導の中、津波に追いかけられながらも母と愛犬を連れて保育園に避難出来ました。娘と息子にも連絡が取れ、家は津波の被害を受けましたがみんなの無事を確認でき、安堵しました。夫も私も一晩、避難所の手伝いをしました。翌朝炊き出しの手伝いをしていると、原発がダメなのですぐに避難だと伝えられ、車で出発。外には防護服を着た警察官の姿が見られ、何かなんだか分からずの避難でした。夫は、津島の避難所にとどまり支援活動し、私たちは夫の妹がいる福島市まで行きました。

◆新潟から宮城へ

原発の水素爆発により、私の実家がある新潟県新発田市に避難し、実家に1か月お世話になりました。その後、避難所(ホテル)みなし仮設(アパート)に移り3年間過ごしました。

夫は浪江町の泉田組に勤務していたので、すぐに搜索とがれきの撤去のため単身で仕事に行き、週末は新潟に帰って来る生活でした。私は地元の保育園に勤めることができ、保育士を続けていました。娘は短大2年生になる時で、いろいろな方のご支援を頂き無事卒業し、保育士として社会に出ることができました。息子は県立双葉高校3年生になる時で、4月に面接を経て、県立新発田高校に編入することができました。素晴らしい仲間に出会え、無事卒業し、大学へ。そして、公務員として震災の経験を活かし、お役に立てるよう頑張っています。子供たちのそれぞれの進路にご尽力頂いた方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

そして、家族の集まれる家を探し、2014年宮城県名取市に家を建て引っ越しました。近所に浪江町から来た方もいて、

行き来させて頂いています。

◆宮城県名取市での暮らし

～笑い文字の活動

現在、名取市の公立保育所で会計年度任用職員として勤務しています。空いた時間に「笑い文字」の活動をしています。笑い文字は、満面の笑顔の筆文字。「感謝と喜びの循環する世界を作る」「書いて半分、渡して完成」。受け取った方が癒されたり元気になったり、感謝を伝えたり応援したり出来ることに共感し、3年前に講師の資格を取りました。公民館や児童センター、社員研修などで教えています。コロナ禍なのでオンラインでも開講しています。昨年テレビや福島の新聞にも取り上げられました。

請戸でお世話になった、名取市閑上で事業を再開された鈴木さんや道の駅なみえで再開された鈴木酒造店さんには笑い文字の発信にもご協力頂いています。大堀幼稚園時代にお世話になった大堀相馬焼の錨屋窯さんや松永窯さん。皆さん、渡した笑い文字を喜んでくださり、お店に飾ってくれています。請戸のお墓参りに帰った際は、浪江町役場や道の駅なみえさんに立ち寄り笑い文字を渡しています。笑い文字が家庭に一枚あることで笑顔になり、活力になって欲しい願ひも込めて、これからも、皆さまへ感謝の想いを伝えていきたいです。たくさんのご縁に感謝です。